

原著

ソーシャルワークにおける行動変容アプローチの一考察

九十九 綾 子

神戸学院大学 総合リハビリテーション学部

社会リハビリテーション学科

[要約] 本稿の目的は、文献を通してわが国のソーシャルワークにおける行動変容アプローチの現状を概観し、課題を探ることにある。学習理論や行動理論を基盤とする行動変容アプローチは、行動アプローチや行動療法アプローチとも呼ばれている。近年は認知行動療法もソーシャルワークのアプローチとして位置づけられており、認知・行動的アプローチとして紹介されている。行動変容アプローチは、わが国におけるソーシャルワークに理論的枠組みや具体的な援助方法を与えるという形でその発展に寄与してきた。今後の課題として、行動変容アプローチに基づく援助が提供される場合、援助の対象とされる当事者に役立つとともに、援助の実践者にとっても活用しやすいアプローチとして発展することが望まれる。

キーワード：ソーシャルワーク、行動変容アプローチ、行動療法、認知行動療法

I はじめに

武田建が1971年にわが国へ行動療法をケースワークのアプローチとして紹介してから半世紀近くが経った [1]。当初、行動アプローチと呼ばれていたが、行動療法や行動療法アプローチとも呼ばれ、社会福祉士の養成機関のとりまとめである社会福祉士養成校協会による「わが国の社会福祉教育、特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究」では、社会福祉士の実践活動であるソーシャルワークに関する用語の一つに行動療法が挙げられ、その定義が示されている [2]。今日では行動変容アプローチとも呼ばれ、ソーシャルワークにおける主なアプローチとして社会福祉士養成を目的とした書籍で必ず目にする [3] と同時に、国家試験でも試験出題基準として明示されている [4]。

こうして行動変容アプローチは、わが国のソーシャルワークにおいて主となるアプローチとして根付いてきた一方で、さまざまな名称や用語が用いられることによって、その研究成果が散見しているように感じられ、実践は着手されつつあるが、いまだ大きな潮流にはなっていないとも考えられている [5, 6]。

以上のことから、本稿では文献を通してわが国のソーシャルワークにおける行動変容アプローチの現状を概観し、課題を探ることを目的とする。

II 行動変容アプローチの名称と関連する用語

学習理論や行動理論を基盤とする行動変容アプローチは、行動アプローチや行動療法アプローチとも呼ばれている。まず、学習理論におけ

る学習とは、経験や訓練を通して比較的永続する行動変容を意味する。行動理論では、あらゆる社会的行動は学習されたもので、行動ないし学習理論によってその学習経路は理解できるはずであり、同じ理論にもとづきそうした行動を変化、変容させることが可能であると考えられている [1]。

行動理論では、レスポナント条件づけ（古典的条件づけ）、オペラント条件づけ、観察学習といった3つの学習原理がある。それぞれの代表的な人物として、レスポナント条件づけではパブロフ (Pavlov, I. P.)、オペラント条件づけではスキナー (Skinner, B. F.)、観察学習ではバンデューラ (Bandura, A.) があげられる [7]。

特に、スキナーはラディカルな行動主義の代表者であり、この考え方のもとで行動分析、応用行動分析は発展してきた。行動分析の一番の特徴として三項随伴性があげられる。これは先行刺激、行動、結果事象という3つの要素の関係をとらえることである。

近年は認知行動療法もソーシャルワークのアプローチとして位置づけられており、認知・行動的アプローチや認知行動的技法といった名称で紹介されている [8, 9]。

また、ソーシャルワークのプロセスにおける評価の方法としてシングル・システム・デザイン（単一事例実験計画法）があげられるが、これは行動変容アプローチの効果測定において用いられているものである。援助前の状況に関するデータを収集する期間をベースライン期（Aと表現）、援助している状況に関するデータを収集する期間をインターベンション期（Bと表現）とし、援助する前と援助してからとの変化を見るデザインはABデザインと呼ばれている。ほかにもABAデザインやABABデザイン、BABデザイン、多層ベースラインデザインなどがある [10]。

Ⅲ わが国における行動変容アプローチの展開

行動変容アプローチは、わが国におけるソーシャルワークに理論的枠組みや具体的な援助方法を与えるという形でその発展に寄与してきた [6]。

児童領域では、不登校や非行、子どものしつけ、親訓練、親と子のふれあい講座の開催などで実践報告がされてきた [5]。親と子の関係における深刻な問題として児童虐待があるが、その解決を目指して開発されたペアレント・トレーニングについては野口啓示によって書籍やDVDが作成されている [11, 12, 13]。

障害者領域では、知的障害者への職業スキル修得訓練や知的障害者の自立生活への取り組み、てんかん患者へのグループワークなどが報告されている [5]。三原博光は、障害者の各施設における行動変容アプローチの実践事例をとりまとめて一冊の本にまとめている [14]。佐久間徹はこれまでに重度障害児、特に重度の自閉症スペクトラムの障害児にフリーオペラント法で援助を実施してきており、その実践は本にまとめられている [15]。

高齢者領域では、要介護高齢者の尊厳ある生活への援助として、社会的環境を整備した実践報告や [16]、老人保健施設での過剰な要求行動のある高齢者に対する刺激統制法や環境調整の事例 [17]、認知症高齢者の被害妄想的表現の減少を目標としたり、高齢者の言語的表現の増加を目標として援助した事例が報告されている [18, 19]。

精神科領域では、SST (social skills training) に関する実践報告がされている [20]。今日では精神障害者や発達障害者の就労支援にもSSTが取り入れられ、その効果が検証されている [21]。

望月らは、ラディカルな行動主義のもとに応用行動分析から行動福祉、そして対人援助学へ

と発展させていった [22]。サトウタツヤは、対人援助学 (Science for Human Services) について、「助ける」という 2 人称的社会的関係とその十全な実践のために特化した新しい学範 (ディシプリン) であると紹介している。さらに、対人援助における一般的目標設定について望月の私信を引用し、「個別の当事者 (被援助者) の自己決定に基づく社会参加のための選択肢の拡大」にあると述べている [23]。これに関連して、望月は行動的 QOL という概念も提案している。

IV わが国における行動変容アプローチの課題

わが国における行動変容アプローチの現状について概観してきたが、そこから浮かび上がる課題について検討する。

第一に、徹底的に方法論的な行動変容アプローチを追求するというよりも、実践の背景理論として活用されるようになることが求められてきている。望月らが提唱している対人援助学の目標設定にもあるように、周囲が求める行動ができるようその個人に変化を求めるといった援助ではなく、その個人が社会参加できるための援助が必要とされてきており、そうした援助が継続的に提供できる実践モデルの開発を進めることが重要となる。これは、芝野が示した「社会福祉実践モデル開発の理論と実際—プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント—」や「ソーシャルワーク実践モデルの D&D—プラグマティック EBP のための M-D&D—」で示されており、実践が積み重ねられてきている [24, 25]。この流れはソーシャルワークの定着化という点で特に注目されてきている [9]。行動変容アプローチをベースに、わが国におけるソーシャルワークの実践モデルが開発されることで、ソー

シャルワーク実践を利用者に明示し、説明することができ、その効果を検証することができるとともに、継続して安定した援助を提供することにつながる。

第二に、ソーシャルワークにおける行動変容アプローチについて、支援の対象とされる当事者はもちろん、実践者にとっても理解されやすい形で説明され、基本的なアプローチとして使用されるようになることが望まれる。本稿の II で、行動変容アプローチの名称と関連する用語についてまとめたが、使用される言葉は専門用語が多く、普段と同じ用語であっても、行動変容アプローチで用いられている場合に意味が異なるものも存在する。こうした難解な用語による障壁に阻まれて、行動変容アプローチの使用をためらう実践者もいるであろう。同時に、当事者へわかりやすく説明することもできず、援助が提供困難であったり、当事者自体がその援助を利用できなかつたりすることもあるだろう。これに対して、武田と津田は積極的アプローチとして、読者にとってわかりやすい言葉で行動変容アプローチに基づくソーシャルワークの技法を紹介している [26]。今後、さらにこうした書籍が出版されることにより、行動変容アプローチが基本的なアプローチとして使用されることになるだろう。

第三に、行動変容アプローチに基づいて開発されたソーシャルワーク実践モデルに関する研究や、実践報告が数多く出されることが期待される。行動変容アプローチに基づいたソーシャルワーク実践モデルの開発手法が示され、その実践はこれから本格的になっていくところである。この開発された実践モデルの研究報告やシングル・システム・デザインで効果測定された実践報告はもとより、ソーシャルワーク実践の随所で行動変容アプローチが基本的なアプローチとして使用された実践報告もされることが期

待される。

V まとめ

現代における行動変容アプローチは、学習理論や行動理論という理論的な基盤に支えられながら、その実践においては柔軟に、時にはアプローチの名称を伴わずに自然とソーシャルワークの一連の過程に溶け込むように活用されてきている。これはソーシャルワークにおけるアプローチの統合が進む状況で当然の流れであり、ソーシャルワーク実践に取り入れられるということは、その効果の証明でもあるだろう。

しかしながら、今後ソーシャルワークのアプローチや技法が洗練されていく過程において、ソーシャルワーク実践の随所で見られる行動変容アプローチに基づく援助を取り上げ、実践報告としてまとめ、さらに磨き上げていくことは重要となる。こうした研究がわが国におけるソーシャルワーク実践モデルの開発に寄与し、何よりもその利用者や当事者に役立つことを願う。

【文献】

- [1] 武田建. 行動理論のケースワークへの応用. 関西学院大学社会学部紀要 1971;22:269-277.
- [2] 社団法人 日本社会福祉士養成校協会. わが国の社会福祉教育, 特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究. 平成15年度三菱財団助成研究事業報告書 2005.
- [3] 中村和彦. 新・社会福祉士養成講座8 相談援助の理論と方法II 第3版. 社会福祉士養成講座編集委員会編集, 中央法規, 2015, 165-167.
- [4] 公益財団法人社会福祉振興・試験センター. 社会福祉士国家試験出題基準, <http://www.sssc.or.jp/shakai/kijun/attachment.html> (2016年12月15日閲覧)
- [5] 津田耕一. ソーシャルワークにみる行動療法アプローチの意義. 行動療法研究 2003; 29(2): 119-132.
- [6] 武田建. ソーシャルワークにおける行動アプローチの台頭. 総合福祉科学研究 2010;1: 1-16.
- [7] James E. Mazur. Learning and behavior. Psychology Press, 1994. (=磯博行, 坂上貴之, 川合伸幸訳. 『メイザーの学習と行動』, 二瓶社, 1996.)
- [8] 津田耕一. 認知・行動的アプローチ. 岡本民夫監修著, 久保紘章, 佐藤豊道, 川延宗之編著, 社会福祉援助技術論(上), 川島書店, 2002, 235-240.
- [9] 岡本民夫監修, 平塚良子, 小山隆, 加藤博史編集, ソーシャルワークの理論と実践—その循環的發展を目指して—. 中央法規, 2016.
- [10] 武田丈. ソーシャルワーカーのためのリサーチ・ワークブック. ミネルヴァ書房, 2004, 102-109.
- [11] 野口啓示. むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング. 明石書店, 2009.
- [12] 野口啓示. むずかしい子を育てるコモンセンス・ペアレンティング・ワークブック. 明石書店, 2012.
- [13] 野口啓示. むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング 思春期編. 明石書店, 2015.
- [14] 三原博光. 行動変容アプローチによる問題解決実践事例—障害者福祉への導入を目標に—. 学苑社, 2006.
- [15] 佐久間徹. 広汎性発達障害児の応用行動分析(フリーオペラント法). 二瓶社, 2013.
- [16] 芝野松次郎, 鎌田芳郎, 桑田繁, 森際孝司, 中熊靖, 吉村弘. 要介護高齢者の“尊厳ある生活”への援助に関する研究—介護専用型有料老人ホームにおける行動療法に基づくDR&U—. 大阪ガスグループ福祉財団研究調査報告書, 1995.
- [17] 遠藤史子, 芝野松次郎. 老人保健施設における頻回な要求行動を示す高齢者に対する行動療法: 刺激統制法とディファレンシャルアテンション法(DA法)に基づく環境変容の効果. 行動療法研究 1998; 24: 1-14.
- [18] 三原 博光. 実践報告 高齢者に対する行動変容アプローチの適用—高齢者の言語的表現の増加を目標に—. ソーシャルワーク研究

- 1999 ; 25 (3) : 223-228.
- [19] 三原 博光. 高齢者に対する行動変容アプローチの実践と問題点—在宅痴呆性老人の被害妄想的表現を減少する取り組みを通して—. 行動療法研究 2003 ; 29 (2) : 133-143.
- [20] 前田ケイ. SST の過程で集団の力を生かす諸技法—精神障害者のリハビリテーションを目指して—. 行動療法研究 2004 ; 30(1) : 23-28.
- [21] 池田浩之, 森下祐子, 茂木省太, 中井嘉子, 井澤信三. 精神障害者の就労支援における認知行動療法の効果の検討—SST および心理教育を中心に用いて—. 行動療法研究 2012 ; 38 (1) : 47-56.
- [22] 望月昭, 武藤崇編著. 応用行動分析から対人援助学へ—その軌跡をめぐって—. 晃洋書房, 2016.
- [23] サトウタツヤ. モード 2 型学習としてのサービスマーケティング—対人援助学との融合を目指して—: 対人援助学の可能性「助ける科学」の創造と展開. 望月昭, サトウタツヤ, 中村正, 武藤崇編. 福村出版, 2010 : 208-232.
- [24] 芝野松次郎. 社会福祉実践モデル開発の理論と実際—プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント—. 有斐閣, 2002.
- [25] 芝野松次郎. ソーシャルワーク実践モデルの D&D—プラグマティック EBP のための M-D&D—. 有斐閣, 2015.
- [26] 武田建, 津田耕一. ソーシャルワークとは何か—バイステックの 7 原則と社会福祉援助技術—. 誠信書房, 2016.

A Study of Behavior Modification Approach in Social Work

Ayako Tsukumo, PhD

Department of Social Rehabilitation

Faculty of Rehabilitation

Kobe Gakuin University

[Abstract] The purpose of this study is to analyze the trend and task of behavior modification approach in social work. Behavior modification approach is based on learning theory and behavior theory. It is also called behavioral approach and behavior therapy approach. Recently, cognitive behavior therapy is introduced in social work. Behavior modification approach has provided the theoretical frame and practice models. It has contributed to the development of social work in Japan. Behavior social workers are required to study behavior modification approach which both users and practitioners feel comfortable.

Key Words: Social Work, Behavior Modification Approach, Behavior Therapy, Cognitive Behavior Therapy